



門多

號 281

卷

三言四六書圖臘大日如

五季日大會匯言合



嘆茶餘錄

茶人往往草

抄錄

黙茶館添初稿

香實老人

著

雙鉤摸寫

某も深ちあくハ其の体悟草略小葉紙多てゆ代り  
又謝毎法網の家不詣り一時某葉紙没して空すてて  
河を此時までハあ方小のミ葉紙乞少人きよひ事の  
宣文年中ト太山乃靈巖寺の内焉寺中座禪する僧  
葉紙次一トテ賜つと洋々し是より善く葉と飲む  
一ト公をさしもす。葉の以式定らす。重の法網は乞  
田を始めて葉紙と空心法網と復州寛陵の人あり中興  
性善紙好く葉紙と著。葉の功名。葉のは法網。葉  
具二十にと告す。乞近仰慕する者多。又法網建廟  
行う。時山川の画祖一幅と望聞。并に第一経秦一

左翠一派と側て小屋因島のいわらの書の祖ととせ  
よふ。載し革と考く風水ととす。次達のあく年す。皇國  
桓武天皇の延喜は古事記の後編也。而まく宋  
小朝の年とて。日本書もとて。之をもとて。ひかの事記が  
はり行次は革刀割り味ともて本とす。風水の文  
く依りたるよりて。富士ノ山はまことと本とす。風水の文  
はなまく事記もと本の  
**碑**  
**金法曹** 金法曹の碑  
**朱雀** 朱雀の碑  
上黒ととくも歴世の下。宗家の式はととく右史跡  
具ととて。かくと年を生れ代良將軍義政公。あら歴の昌  
應に文政の比徳珠走り門人承諾南都ふ立て。事在慶和  
も。夜半より天正の間。石井年。洪時。以降は。林家書画  
大木集と。うづき語す。筆意。古畫。書画。而て行  
く。御室あり。

御支義改不善曰と兵備は承事あり三事と同用  
内洋處處外外修小薦茶葉湯の式りにて外取名せり權主  
之處次第行見、茶、おそれ、湯引多作多用也は道途有  
過とあよのと中興、主この室下有之印ボノル事のあと取  
已内、は柔軟の便と萬々在焉お良比深少之うて、ハ和敵  
清寂城主と車を天下家事小之うて、トモ  
云々お收ひてまし、あるも、是に以対安ともうち口のてと云  
て、元方丈の室に拵し、即に是日、月に法儀教風と拓きて  
壁と圓と、これ外に、もつて、本ハ法儀法度、此を以て、又其壁  
條通、西側院ニ事トシ、小動不言丈以室と葉きても、其事  
に限る。後云御門渡あ不以葉多、以音ノヲトシ  
くはひと度て、次子牛菴ゆて以子之子の傳、家  
殊主子引拂乃ひ古事記傳度、其御て生て、あ御小管

宗便 宗達 京師小修り 組物引休候 小修り 王侯より裏高  
小字の御事と 宗へとおととをもて 皆先と まし 並びに  
夫孫起と幕あて は筆也 大使寺か多參す 有不多く 稲吉  
小口のひふとく

小口のひふとく

朱人 甚めに通せり がよみあせ、これ  
正體曰珠光 海年 南教水門 もよ 不居本二市 引持  
モ御事も往る 大傳寺 三昧堂 不解りり トシヨリ 甚人以  
善處乃い筆寫 甚めに通せり はよどり、南教東寺等  
情に城土門 大文可之の事あり 本多松至 滋賀郡 トシヨリ  
由緒書以一毛たる事く 文書にて

今之筆の次第 今寺の本法林院本源り 甚めの事 甚めの事  
大室にゆきむれども 师 章清也 トシヨリ 用ひす 甚不師也  
本款の事、まくつけ 法林院と云ふ 法清也と云ふ 事  
もくあし ト共

由緒書

南教院本源

土門左文 可之

可之休、累代南教しに、以故以則 多門山院と号水門也  
之秀で院つり石也 中興 且丈 湾 流肩倒茶入春里也  
舟三種も外筆寫 甚多と、書く之也之也  
法拉はゆ此古方ニ姓、意照度筆政公 トシ御物也  
以久海夫、不も後之の承拂す、タガサラ也  
拉はルト共

筆画掛也 ト共

上品 風韻を絶すに切と因り 但一筆筆色

一文字すより 一文字のあま素直其拙れ珠走る如也

軸を革欄<sup>カウリ</sup>に捲軸をもせむ

中興

絹緋<sup>イシ</sup>を 色用黄

下四

紙車肩紙車入<sup>スル</sup>年

上古 右筆入蓋入り 古耳<sup>アラ</sup>に蓋<sup>カバ</sup>至<sup>ル</sup>細川<sup>ハサワ</sup>三井<sup>ミツイ</sup>ト本<sup>ホン</sup>口蓋  
青小塙<sup>アオコウノ</sup>を御<sup>メテ</sup>おほ<sup>シ</sup>蓋<sup>カバ</sup>きり<sup>リ</sup>と三<sup>ミ</sup>大<sup>タ</sup>筆蓋<sup>ハシタカバ</sup>がて不<sup>ハ</sup>也  
右筆蓋<sup>アオコウノ</sup>筆入<sup>スル</sup>年、用ひずとく由<sup>ト</sup> 下四

右筆蓋<sup>アオコウノ</sup>年

右筆蓋

絹緋<sup>イシ</sup>を

年

右筆蓋

絹緋<sup>イシ</sup>を

年

右筆蓋

年

紙車肩紙車入<sup>スル</sup>年

馬麟画 石室全書小<sup>シ</sup>馬麟<sup>マリ</sup>、<sup>シ</sup>遠<sup>アリ</sup>也 宋画の上<sup>ニ</sup>  
記<sup>シ</sup>シ文は室以<sup>シ</sup>通<sup>ス</sup>也。是<sup>シ</sup>筆<sup>シ</sup>て形<sup>シ</sup>うる全<sup>シ</sup>前<sup>ハ</sup>画<sup>シ</sup>る  
室以<sup>シ</sup>縁<sup>ス</sup>。不<sup>シ</sup>有<sup>シ</sup>筆<sup>シ</sup>形<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>全<sup>シ</sup>の底<sup>ハ</sup>画<sup>シ</sup>て是<sup>シ</sup>筆<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>  
許<sup>シ</sup>由<sup>シ</sup>瓢<sup>シ</sup>草<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>放<sup>ス</sup>。因<sup>シ</sup>此<sup>シ</sup>也

下四

右筆蓋<sup>アオコウノ</sup>年

右筆蓋<sup>アオコウノ</sup>年

右筆蓋<sup>アオコウノ</sup>年

右筆蓋<sup>アオコウノ</sup>年

右筆蓋<sup>アオコウノ</sup>年

右筆蓋<sup>アオコウノ</sup>年

下四

主術と傳へ諸友のは詔略と並んで通統より彌廣  
卿をふのとて

○而後と、之を爲せば、かくも卿を敬すと、  
中無又莫ひ若うち不ほよ坐小院於主中多高殿閑似あ  
と、原とモ一閑而詔略と号す。中西。

正龍曰詔略是子孫也。尼蒲小年はサヘハメノのよ  
勅。金傳定ともうつて次々と教も傳す。仲定も葉  
子のはと

○十利休は堺今市の人初に田中氏後千利休をひむ黒壁  
寺に布施給ハ室町家少はて因明役とつとの先と千河承  
と正村氏承は家易と改じ。中西元龜年中。  
正教阿上皇の勅。すもて茶室と割りてある。  
と皇室とそなへて居士の号と。徳。秀吉より三毛

御殿跡のよ中西翁豈のな古渡和焉大徳寺の裏後院には  
船橋をとる。小酒で力とけくて強走は立派と往  
じ資財と金には紫電乃山門としとて法事と多至  
し。その像は、小己り肖像。あれく太閤のとある  
ととして還とて因て自殺す。天正十九年二月十九日奉年  
仰すり葉室裏度小算の碑西利休字易居をと。之  
○兼比庭厚向と能和能敵能清能寂あり是利休蓋  
殊えり。車の御不善と有りて。御前御中  
御の名是休

○天王寺全宗及吉保の爲も津田家をのす更幽庵天  
信と号す。江月和志の文す利休と同く。あたは年は  
三千石と以す法昭ぬ高信不接する。文書と書小笠主  
にて父の善治所。妻室園師と語りて次代の計とす

○利休の多角道善  
辯五方の文松葉傳

印紙等めりる筆一枝下取り漏氏譲り字也

八月にて有り

ト集

○坂南家寺下南坊家磨正統日銀改の庵婆掛小  
利休が後カ禮枝マツキとくち文タケシた手藏す

智書

一賓室婆掛小來自元人手稿イリハシ之版と手て書と

板

一中林の手稿シナノとすとくヒタチは所見汗夢ク  
序シナも清ヒタチ字の序シナへシナ筆飯の法具名爲  
弟シナもみシナし森邊の樹名玉山の山シナと不被當  
是よりシナ爲シナ也去シナ

一湯湯ね風小手ひ達解シナは定再東陽シナとひ相

の差シナとす手多還シナ

一庵角シナ序シナとすとシナ世半刀難シナ五來夢シナ

一寔シナと婆シナとシナ会シナ云今色シナとシナ有シナ歎

一二乞シナ始シナ二府シナ不シナ次シナ化シナは活活候シナ也

うつまき利

右大萬と筆名シナはばや、皆承掌不可忽シナ也

天正十二年九月三

南坊

家易

○古田家拂後海原下城被シナ印承シナし承シナ筆は家易  
小室シナ石子承シナして主拂小接シナ城田シナ家易因  
宗直シナ承シナす筆者シナ小參シナ金甫家易  
兵士シナ号シナえふ年家易シナ行シナて自解す

○佐久間直勝、將監と称して佐々木下あり。大活亮精々。  
木人の名づけよし山（小山川）の名と以て大神宮の子あり。其坐  
は其と南洋半ト建うせの人也。レニシテ之を以て  
木乃序木碑。云ひゆきより木乃序山御宗可長生ト彰す。

○家是祖  
羊以角代

筆以爲景と爲筆と其の事と  
宗祇哥  
毛の筆とある事とて毛筆と云ふ事と  
宗易の筆と謂ふ事とて宗易の筆と云ふ事と  
左筆と云ふ事とて左筆と云ふ事と  
がちの筆と云ふ事とてがちの筆と云ふ事と  
古哥や左筆と云ふ事とて古哥や左筆と云ふ事と  
夕月夜は毛筆と云ふ事とて夕月夜は毛筆と云ふ事と  
この筆の事とてこの筆の事と

宋故奇

卷之三

正詔曰珠光以來乃差人多數一時以理事未去  
以爲多事也小葉訛子之流肺火候と差て杜毒  
にいきて之を別下一毛と號ひと云ふと亦ハシツ  
は支毛利休ノ子孫も又ノ以爲統毛前不羣毛居  
條中少詳也此ノハリ小利休にはのどか毛也

田中与兵衛嫡子

不審庵 楚笙齋 利休居士

田中氏

宗易

後三千改公 天正十九年辛卯二月二十八日沒 七十四歳

宗淳

少庵 蘭房四扇室門

宗旦

蘭房十九年甲寅九月七日沒 今日庵 咄庵 元叔 又元伯

宗左

宗旦三男 万治元年戊戌十二月十九日沒 江岑 道源齋

宗左

寛文十三年壬子十月二十七日沒 寬文十三年壬子十月二十七日沒 堪笑軒

宗佐

宗左子 良休 隘流齋

宗佐

元祐四年辛未七月十九日沒

宗佐

原叟 覺齋 流芳軒 寒久田宗全子

宗左

原叟子 加心齋 丁軒 天然 初宗貞

宗左

寔延四年辛未八月十三日沒

宗左

文化五年戊辰十月六日沒

千氏八上京ニ居 蔽内ハ下京ニ居住ス故ニ時ノ人  
千エヲ上流トシ 蔽内ヲ下流トス

以下子孫六人系曰略之

正齋曰右四流也千氏以流有り者也ト不づ林

織田有樂

信長之弟

従四位下侍従 長益

俗稱源太郎

有樂軒

如義

落髮シテ融賞上云

茶法ヲ利休ニ受、利休沒後宗

匠ト称ス有樂流ノ祖

元和七年辛酉三月十三日卒七十才

主膳正貞隆之男

従五位下 貞昌

片桐石見守

宗閥ト号ス

茶法ヲ古田織部ノ以テ東山左近ニ受又利休并遠州三

学ヲ去遠州卒後多賀左近ト舟越吉勝ト貞昌ト三才

宗直ト称ス

石州流ノ祖

延宝元年癸丑十一月廿日卒

正齋曰

右小堀昌高家今號連綱ノ流脉也繁衍ス

小堀遠江守

従五位下 政一初名作助

宗甫居士ト号ス

又孤蓬

茶法ヲ古田織部ニ受

和漢名墨ノ品ヲサダメ

ノ茶事ノ師ナリ

遠州流ノ祖

正保四年丁亥二月六日卒

享十九才

正齋曰其茶及以流脉也示游蔓す

久田宗榮

宗易門人房政俗稱新八郎

落髮メ宗榮ト号ス

母・宗易ノ妹

茶道ヲ宗易ニ受遂ニ茶事ヲ成

ト久田流ノ祖

寛永元年甲子三月六日没 享六才

宗利

貞享三年乙丑十一月七日没 七十五才

宗第子

受得裔ト号ス 俗稱利兵

茶道ヲ宗旦ニ受

一本三宗玄

以下共省  
左四人少

嫡流玄

宗悅

涼濱裔

木巴

紹慶

宗溪

提鼎裔

磧翁

宗也

宗全

宗利

宗嚴

宗也

宗玄

宗也

宗參

宗也

宗利

得与裔上号入

俗稱与ヤ勘堂

業道シ江岸ニ安

宗全

宝永四年丁亥五月六日沒

辛一采

宗也

延享元年甲子正月十三日沒

辛十四采

宗也

宗也子

芳烟上号入

又厚比裔

宗玄

明和二年乙酉正月十三日沒

辛十七采

耕甫

宗參養子

春裔上号入

寔八佃氏子

耕甫

文政三年庚辰二月七日沒

辛十九采

耕隆

宗隆

文政七年甲辰月日沒

耕隆

宗隆

原豐川人

○松屋宗二

坐只裔

嘉隱軒

石塚宗通以下別卷詳之

原豐川人

○松屋宗二

坐只裔

嘉隱軒

松屋原人祖

原豐川人

○松屋宗二

坐只裔

嘉隱軒

宗立

明和八年辛卯十月廿五日沒

七十一束

號古齋

樂只軒

宗政

一等齋

六十一束

宗俊

不羈齋

宗立

不俊齋

宗二

玄之齋

山故曰古三氏乃數粒多一粒と有きて是と取る。又  
何者也其後と以よ多う也。ハ草木はうむとおせき。

號古齋門起事之日

雙葉院深源妙善房

樂業院深源二席抄錄

治田寺家

○武藏國豊島郡魚江郷子安山古音寺所安正明  
惠上人住利休居士所持陸鴻漸木屋士菴分守不差

因學之

○珠光老僧像

因學之

座色有四和敬清寂畢竟如何

玄之齋

高叟志人歌

○不佳齋曰中醫珠光祖師中也モ大抵不時不兼年  
利休より業に兼約以時刻りつて主事思ひと定  
じり下巻

○河原院言 美吉少佐之入局の前被河原院言  
於庭ノ利休少佐をもて拂成らるし其日の至る  
事よりく考古之廣義ノのじゆ中河原院言

少名身し後世尊ウツにて傳マサシとモ阿彌宣アミタブハを少  
ソシテ名めあとナキ事也。因云キタク利休細三郎ニ及ヒ御用拂ムツヨウフ御處也。  
はれ様カタチとぬきスル程シテ大タカシトモハ源田辰の傳マサシ  
セシテ名めあとノリシテ拂ムツヨウとシテ拂ムツヨウとシテ少用  
正忠マサタケ乃オホシ人ヒト也。ありシテ室ムロ御持ムツヨウ御御之  
高タカシ一ヒコ人ヒト也。又シテ室ムロ御持ムツヨウ御御之  
生マサシとシテ一日ヒツもシテ室ムロ御持ムツヨウ御御之

○虎張 千氏筆書曰一名障マツリ原ハラ名メイ利休好マサヒす。  
○因云キタク不淨泥ムツヨウニのシタマ古アヤトシテ長ロハ之ノ淨  
泥ムツヨウニ取リと子玉コシタマのシタマおよシテ利休リフ便リハシ也。又シテ  
利好リハシ小切コマツナギとシテ作マサシ也。

○湯則茶飯マツドウ則飯

○石龍曰宗徳翁ムツヨウ小世二種コトハニツウ有  
宗徳ムツヨウ自在庵ムツヨウジヤンと号メイす宗徳ムツヨウ門ムツヨウモン也。寔近シキニ乃シテ此  
人ヒトあり。葉家ハガタ宗徳翁ムツヨウ小世二種コトハニツウ有メイ也。

○世間 出世間ムツヨウの法。正龍曰林氏ムツヨウ本起十界ムツヨウ行可地  
獄ムツヨウ篤定ムツヨウ高生ムツヨウ修羅ムツヨウ人間ムツヨウ天上ムツヨウ也。六道ムツヨウと世間ムツヨウと次  
總界ムツヨウあり。量ムツヨウと世間法ムツヨウと。詳聞ムツヨウ緣ムツヨウ眞薩ムツヨウ佛  
法學ムツヨウと。生世間ムツヨウと。次總界ムツヨウと。亦離せぬの名ムツヨウ也。真諦  
出生世間ムツヨウは。生世間ムツヨウは。法爾ムツヨウ自生ムツヨウの謂也。經論ムツヨウ以ムツヨウ爲。  
○利休リフ袖スリノ實ムツヨウ無ムツヨウつムツヨウ足ムツヨウ也。口切ムツヨウと。締ムツヨウ。古締ムツヨウ。西教曰大  
勝ムツヨウ也。至從ムツヨウ乃シテ生出ムツヨウ。以ムツヨウ爲。經論ムツヨウ之ムツヨウ也。

○不審店 利休茶ムツヨウ小室ムツヨウ。うりて。東起。小。ハ利休經葉  
中ムツヨウ也。利休經葉

小油井村の事  
はちまくの事  
の事

○田舎乃候より利休へ乞去るの月を勾  
角にて有事出でて江戸へひし、後利休  
不思議の事と謂ひて其事に付けて利休  
事事多く奇素あり、茶、飲などといひやう  
○利休の如き人を序、こりやあらがよまくとひ  
之より生乃多きわざと  
○利休の年以切小丸巻と生れ、名、涉  
も丸巻とまづし生れ侍ともいひ利休と云ふ乃也  
好、生れ侍て底う生れし、あ、あは切小丸巻とまづ  
名、名四方巻とつうむら山と申すて、ね

卷之三

○上巻注 製樂亭 玉手三年水音去之。事取一株のあ  
二株以上や坂と算す。壯麗其派と云ふ威まゆうとて殿  
閣や、七宝以達り。名余奇石と集くる。因土之年官  
行李幸。けり。か歎。江御會。御能等。けり。玉名閣。秀  
次局。住。けり。しき。又。祥。官年江城元より。松岡。こゝ  
こ。江半段。小。ひき。と。く。き。而。聚。東。い。あ。の。く。も。下。ア。叶。の  
愁。矣。と。ち。く。よ。 製樂亭。と。そ。う。せ。い。阿。數。  
○住吉全宗。多。正。故。日。山。是。氏。學。の。住。い。心。室。主。は。永。久。主。の。子。と。是。多。  
利。休。の。門。へ。を。利。休。宗。久。宗。吸。の。三。教。本。は。と。古。有。利。休。の。門。へ。を。利。休。棚。ふ。り。の。入。ト。高。き。生。て。口。方。を。高。め。と。モ。ら。シ。利。休。棚。ふ。り。の。入。ト。高。き。生。て。口。方。を。高。め。と。モ。ら。シ。  
と。リ。所。も。端。と。入。る。も。間。利。休。棚。ふ。り。の。入。ト。高。き。生。て。口。方。を。高。め。と。モ。ら。シ。  
岩。と。又。猿。猿。棚。ふ。り。の。入。ト。高。き。生。て。口。方。を。高。め。と。モ。ら。シ。

之奇あり。其の如きをもてて、まほれと申す。考去る事無  
事行り。

あやて醸く舟柳の冰

宇治鴨川の御用

佐吉と下善慶の冰

○利休庵と云ひ、茶の湯を極人の達筆の如くに考

り、了の如き事も、不思議なり。

○又曰數奇全以衣冠を年次おとすて、

因て是小袖をす。

○先生曰よしと不す。アラシ堂の如きは、脛筋に

つづいて、おとす。本ら中です。アラシ堂のよも

吉の如き。おとす。善慶も、之を連続する所多き

○又曰ひやく抜くは、かくにとくとく年ある

以よき、美しくとくとくある。

○又曰善慶乃歎きつば日也。敏之亨うたがふ。本貫に  
てとくとく一絃をつらひ。よのやも盛る。つまぬ墨に  
し善慶を清めて、おまかとし。細き絞締、津身にまち

肉はよき。もとへつる。肉をあき、妙りともかく

あててお墨、とくとく。用ひられたれど、革の

善慶にまつてよ。詳議。年十行。

○又曰ひやく能く。良具の多き。善慶小巻の多き。三

主相不名の多き。ニニ若宗は因の多き。文嘉の多

葉は本ノ多き。善慶にまつて、スルアリ。之が珠

縁の灰

○又曰石を立てて石を立とせると、善慶。善  
慶。善慶。

あと薦はゆどりやくへておとせとひ  
すまかうとまほに達るに達るに達るに達る  
年年年年年

○又曰國とぞの屏風後乃玉生を以て是中  
之がまかうとまほに達るに達るに達るに達る  
行く所へり。せんとす。傍立あり。ウツクシ  
きよきよ。こりへ。アラハ。アラハ。アラハ。  
○又曰敷奇とぞの屏風後乃玉生を以て是中  
うりへ。アラハ。アラハ。アラハ。

○又曰車とぞ振子を以てさく。次立踏りつま  
様子。アラハ。アラハ。アラハ。アラハ。  
薦はゆの上へす。

○又曰薦はゆとぞ。時不そと上へす。アラハ。

薦はゆ。うちと大仰たり。不具れ。にはい。ひま  
む。もあし。

○又曰初とぞの之規矩。以て薦はゆ。功者あるも  
若ち薦はゆと以て薦はゆたのまくらとぞ。紙被と  
角。アラハ。アラハ。アラハ。アラハ。アラハ。  
功者あるとぞ。アラハ。アラハ。アラハ。アラハ。  
○又曰若に緒で年年底に因に。アラハ。アラハ。  
とぞ。功者あるとぞ。アラハ。アラハ。アラハ。  
アラハ。アラハ。アラハ。アラハ。アラハ。  
アラハ。アラハ。アラハ。アラハ。アラハ。

○度長ねうえの井戸。アラハ。アラハ。アラハ。  
アラハ。アラハ。アラハ。アラハ。アラハ。アラハ。

○信玄公、秀吉の御茶の湯好みよりハ源氏、右近  
半身をもて所以を宗徳宗旦門人竹下平左衛門  
密ト仕テトと也

○源氏の陶工家慶と子者徳化し  
陶器と割石始みたり是樂譜（利休朝鮮刀劍等の事）  
一首小聚半身をもて源和の役あると  
又二代目より告洛布（利休朝鮮刀劍等の事）と云  
と云（利休朝鮮刀劍等の事）其子母を日東  
系図（利休朝鮮刀劍等の事）と云（利休朝鮮刀劍等の事）此とよりは半身連続取締り  
（利休朝鮮刀劍等の事）

西軍と或人小得をひ而左京舉く

元祖 宗慶 唐山人飴屋上云

天正二甲戌年没

祖 長祐 宗慶男。田中氏サ姓レ長治郎ト云

文禄元壬辰年没

元常慶

長祐弟。長治郎改名吉左衛門。○一首曰ヨシヨリ  
樂ノ字太印ヲタマテ 宽永十二亥年没

長祐弟 吉兵工 畏名 ノンコウト云

明暦三丁酉年没

道入男 佐兵清 改名吉左衛門

元禄九丙子年没

道入男 吉兵清 改名吉左衛門

享保元丙申年没

宗入男 吉左衛門 改名吉左衛門

元文四己未年没

左入男 宗吉 改名 吉左衛門

宝曆九乙卯年没

実左三男 佐兵清 改名吉左衛門

安永三年甲午年没

八代長入

七代長入

六代宗入

五代道入

四代入

三代道入

二代常慶

一代常慶

九代 入 長入男 吉左衛門

十代 吉左衛門 了入男

○宗味 長祐弟 庄左衛門 塚三住入

一元

實、一入二男 佐兵作。○一召曰一元別一家  
享保十六辛亥年沒

二  
孫丘祐

一元男 任土裔。任土裔上云  
寛延三庚午年沒

四  
孫兵祐

任土裔男 玉水院裔上云  
○一召曰老後樂翁ト号ス

五  
甚兵祐 榊裔男 梁翁ト云

○道樂

長祐弟 志左衛門 左樂ノ印アリ  
寛文元年辛丑沒

○妙慶

常慶妻 常慶死後剃髮シテ妙慶  
上云ソノ子幼少ナルニヨリ 母ノヤマトヨル焼

ト云テ樂焼トハヤ失。○一召曰妙慶 宗慶妻  
妻ナト年紀ナハアオスニ宗慶ハ天正二  
年ニ没スニ年ヨリ尼ノ死年正室安ニ  
七十六年ナシバラ二召ノ説ハ誤リサラン  
唐寧ニテ乙年没

○妙脩

左入妻 紗脩焼ト云  
明和八年并年没

以上。

一晉曰道入とソコウとソム事リ宗且ヨリミテ  
一主ゆれサトノモ入と却てキハソシテソコウ  
セヨソシス、トモハタマヘテテテテテテテテテ  
トガモリ宗且ヨリヨミソコウガ前ノ以ル、  
ソイナホモアガニ名トアリシト  
或人曰ソコウとは頓悟ムキモトト開ハス脱  
ハヨキハソコウの又字アキナリモトモトモト  
頓悟トヨリテ重音トアキモトモトモトモト  
正詮抄學之

○長落、扇引渡、革破小刹体、以諾サ、七品、  
こひ、樂葉破の七品、又、洋破、左不掌  
大恩里注異々、辨同里、上、東陽坊里、木守青、上  
早船赤里、接校赤里、臨濟赤里

右七種以形と樂乃代、摹<sup>ウツ</sup>にて七種トソ、因學云

○夢想圓師以形下

幸も林き自教の事、小あひ、ノ、江口もる流  
ノ、おき、も、れ、れ、れ、れ、玉葉集

古大臣

旅みづり、小山やま、て、石、川、山、川、山、川、山、  
少、あ、や、ま、て、石、川、山、川、山、川、山、川、山、

こ、そ、く、は、あ、り、り、り、り、り、り、り、  
幸、川、水、八、か、ま、に、就、が、  
よ、の、き、謝、ゆ、ら、尋、ゆ、

○秀才ヲ利休、大佛ノ因縁、成、アヒテ、京の廣  
ヤ、上、レ、シ、あ、ん、キ、  
○宗且數寺、金と小度數、躍上とく、アヒト云

○宗旦以歌小休人日この日をも一軸

葉以酒とは耳やうほの日にはくにほく一年もあー

○庸軒 五古庵又徵翁也号す十二全と云も其文  
四氏後左村に改じ佑木は葉あり其後逃開済薄  
うて傍まと好んでよく經史にかゝりまくをにひ於  
欲説中葉宗旦以人四天王以一人もと葉唐軒流す  
（傳）叶と叶は祖とせらし 宗旦より葉道と號す  
葉詩別集一巻と云ふ 宜軒葉道記と云ふ一紙  
○相生但る守宗矩宗旦に喜葉と詩い心知として  
んしそれに一占ひいたちとソシ、亦あうりしがともあと感  
且、よ兩人紙紀かと/or一媒一て仕えとあと  
而能持小宝石數事かとさがは前ありと云ふと

是吉家旦歌と云ふと云ふ

○上号半田底取 下號

一ノ口曰底取土鍋ハハ田素燒也津ノ國木田村に細工入  
りて即ハ田寺と云寺、りて、而之在有木村あり鉛錫時  
代よりりて玉下一玄載二代月長載云々<sup>イ泉</sup>  
又曰又號枝桙川小半田村少云りて、之所字灰土鍋  
と號く即半田後枝東寺主あり、半田後枝櫻小賣  
貰する半田主より之禁ある

○櫻の沸不と音、家旦才一歲をもとし、家旦の  
こと葉以点一とす、上一小壹天目生てそんと葉  
人不善と進へてひどし、沸尋りやもひ、沸不善

すとおもふ人へ進みするものありとされど、以て不覺を  
体にモトろぐれたほしとぞ思ひてス。沛入を急つゝと小屋  
造りて主人以てくとてあり。よりよき者を古押小屋  
舎志すと店舎に毫毛を以て拂ひて、茶はぬらせとある。  
数奇を伴ひ、茶はるにゆきと坐拂ひて、やうと小休は櫻鐵壘  
あしはるをうなびて、りむとふと座坐か、毫毛より余分に  
浮き立波小春よびありたまひ。後日、うまと入るを計  
りん時、之を天朝下す沛茶奉上して、や上へ。沛  
沛然嫌するをうなびて、もとをし。

○南浦和尚姓下：嘉元三年、今茲文政十三年、五十四年の秋。  
詔伏見淀やまと參内、いわく小春、沛茶奉上。沛茶奉上  
齋慮殊不見る。此時不有茶試歟。一、  
呂上らき。餘りはよのゆわち、賜ひて、ハ聖事

よと水巾と生じて、沛茶碗と、うさのせて、次載に  
し、且、薰小帽幼て、固也終まつり、うかじ。

○南浦和尚名、紹明駿河國の人。宋入て虚堂

智恩ノ法と嗣焉。然て、詔食建長寺不往す。

大徳寺圓山大燈國師宗峯妙超以師号を立。唐事

に、高す大應國師少溢と賜ふ。

○被子サツ和巾フチ服幼キヨシまく。被子の音に轉せる。林  
潔、きよと通用す。彼先祖ハ宋乾以者也。林淨因云  
林れ諸々後裔少い。傳下至仁寺第二世、龍山禪師至正  
二年、元の順宗即位十年、皇國南歸。後村上天皇弘  
治三年、正徳四年北朝去。光明天皇弘永元年、高祖文  
十九年也、四百帰朝の時、沛不奉りて、詔勅と御号を  
し、南都不仕し。フクサと、失ふす後京都小姓りて、馬九  
只住す。淨因曰、日本にて子孫も叶ひて、可としての、アマた

まことに之を常國サトヨシト

○本藩鑄物師棟梁水里太郎左衛門<sup>ハセムツ</sup>、内用以  
替し、信長、秀吉、天正、元和、食と酒と諸々、菓の酒肴金  
并、花入等と傳たる。其國并小由緒等、奉長<sup>ハセムツ</sup>、  
次第不謬<sup>ハシメテ</sup>、而小載せば、

○本藩鑄物師忠三郎<sup>マツミツラ</sup>の先祖、永禄江原幸有井郡守<sup>モリ</sup>  
村<sup>ハシメテ</sup>住<sup>ハス</sup>て、<sup>ハシメテ</sup>金<sup>ハシメテ</sup>生<sup>ハス</sup>す。後、清徒<sup>ハシメテ</sup>住<sup>ハス</sup>す。えかの源<sup>ハシメテ</sup>  
公<sup>ハシメテ</sup>、庵<sup>ハシメテ</sup>小<sup>ハシメテ</sup>移<sup>ハス</sup>。唐<sup>ハシメテ</sup>金<sup>ハシメテ</sup>小<sup>ハシメテ</sup>葉<sup>ハシメテ</sup>の所<sup>ハシメテ</sup>以<sup>ハシメテ</sup>風<sup>ハシメテ</sup>煙<sup>ハシメテ</sup>釜<sup>ハシメテ</sup>の數<sup>ハシメテ</sup>  
再<sup>ハシメテ</sup>無<sup>ハシメテ</sup>す。皆<sup>ハシメテ</sup>家傳<sup>ハシメテ</sup>乃<sup>ハシメテ</sup>法<sup>ハシメテ</sup>不<sup>ハシメテ</sup>す。而<sup>ハシメテ</sup>生<sup>ハス</sup>す。氏時<sup>ハシメテ</sup>不<sup>ハシメテ</sup>至<sup>ハス</sup>。移<sup>ハシメテ</sup>又  
送<sup>ハシメテ</sup>漏<sup>ハシメテ</sup>を以<sup>ハシメテ</sup>味<sup>ハシメテ</sup>の有<sup>ハス</sup>。上<sup>ハシメテ</sup>京<sup>ハス</sup>し、釜師庄兵衛<sup>ハシメテ</sup>通<sup>ハス</sup>。より  
きて、計<sup>ハシメテ</sup>一々小豆<sup>ハシメテ</sup>の聲<sup>ハシメテ</sup>不<sup>ハシメテ</sup>せ。用<sup>ハシメテ</sup>い<sup>ハス</sup>る。近頃<sup>ハシメテ</sup>更<sup>ハシメテ</sup>多<sup>ハス</sup>。系<sup>ハシメテ</sup>統<sup>ハシメテ</sup>得<sup>ハシメテ</sup>也<sup>ハス</sup>。

久左エリ 以上數代同名

下略

二 新六人呼<sup>ハシメテ</sup>李伴<sup>ハシメテ</sup>新<sup>ハス</sup> 三 嘉<sup>ハシメテ</sup>左内門<sup>ハシメテ</sup>庸貞<sup>ハシメテ</sup>  
四 忠三郎<sup>ハシメテ</sup>氏時<sup>ハシメテ</sup> 四 玄<sup>ハシメテ</sup>院<sup>ハシメテ</sup>之僅載<sup>ハシメテ</sup> 五 忠三郎<sup>ハシメテ</sup>氏貞<sup>ハシメテ</sup>

六 忠三郎<sup>ハシメテ</sup>庸秉<sup>ハシメテ</sup>

○家旦<sup>ハシメテ</sup>國<sup>ハシメテ</sup>千家<sup>ハシメテ</sup>以<sup>ハシメテ</sup>金<sup>ハシメテ</sup>三十圓<sup>ハシメテ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>有<sup>ハス</sup>。忠三郎<sup>ハシメテ</sup>  
ノ家<sup>ハシメテ</sup>不<sup>ハシメテ</sup>全國<sup>ハシメテ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>、<sup>ハシメテ</sup>臺座<sup>ハシメテ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>差<sup>ハシメテ</sup>へ<sup>ハシメテ</sup>縮<sup>ハシメテ</sup>臺<sup>ハシメテ</sup>と<sup>ハシメテ</sup>左<sup>ハシメテ</sup>  
載<sup>ハシメテ</sup>す。四 玄<sup>ハシメテ</sup>院<sup>ハシメテ</sup>之僅載<sup>ハシメテ</sup>

大金<sup>ハシメテ</sup>  
宇賀信濃

宇<sup>ハシメテ</sup>ト

御金<sup>ハシメテ</sup>

七<sup>ハシメテ</sup>

下略

琉球瓦炉ニ取合ノ釜<sup>ハシメテ</sup>面<sup>ハシメテ</sup>ノ

○清水系譜 家之紋結文向鬼

品道潤

実名宗怡

洪紙庵ト号ス

世ノ火炉道潤又古道潤ト云

元治陽人吉田鐵部門下仙臺政宗ノ弟道トナリ福井直石  
賜ア興高志下ル近江堺遠州澤ア別ア情ニ伏見ニ於テ美ノア

贈リテ

思のあらこうして考りをしてのうちに  
わたりたましひととぞとてこそとぞ

某ノ猿若臣名物是也仍ア黒名ア猿若ト称ス絹路所持猿面棚

古鐵ヨリ傳來ス

慶安元戊子年六月廿日京都

于テ死ス 行年十九歳

法名 半雪道潤日應居士

此系図以下承認シ

寒葉絵録二萬枚 終

天保八丙年春二月六日夜寫于寒葉  
室南窗下

兼人はとく利 手添

以竹紙に書ふ事以降生年の甚庄

一ノ一一家上のわびとつまこと取はんことを知  
らすまたまよとぞとぞとぞとぞとぞとぞ  
てれき羊々水こぼよとぞれまでうきよまぜそ  
用ひよ萬よとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ  
内は

羊ふいとくとぞ葉をとぞとぞとぞとぞとぞ  
葉根をとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

拂葉よとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ  
出松葉全平娘をねおれせんをかまどり茶用い  
まひ年貯うます  
ゆゑにろましとぞ叶はとぞとぞとぞとぞとぞ

あとにとくふとくちうが  
風も吹かずちうへやまといとくありともやあす。  
主宝はくふりさんてわきあうへしとくい大富  
浪石柱乃在木の中に

じつと甘心を厚むたうとて石柱のもので  
さううさーとあらへり  
あらまゆすの言ふたこあはてぬ候乃因縁か  
可あはれにせうかさうあらはまゆき身たるを  
うへよゆしきる

石柱のまづき御不くとそくよゆか  
のやれあらへくのせよ人の本源だにあらんもあ  
と拂きくらねまや人あらまゆりにゆき  
萬人ノ儀拂うるる京成ト見て一候キノ事

あうとまくと和人田乃切金をサテ丁々度要毛<sup>ニ</sup>  
池家等の筆を留メ物の位は一樣不調で終はば  
あきれて新滿ノ敷れ合ひたゞくに候をもと奉  
教すまよりは古事記を以て仕はへと取れる

達者をとく代を雄化不ぞをもと文字すくば  
名とてててせんとててる或人代を雄不ぞをもと奉  
ますまよじやあらへたゞくにせうかさうあ  
よく拂り去る

主ゆつまくとお物をとこあよのまし、主はまし、  
己事中小葉流をとねつ不委實とす事は運行  
已福者に傍上とてほり不直をいしてゆく底あ  
有

まき葉人乃に至る事一三は後半を書く事有  
侍る

一 番う茎もひかりとて、大古葉なり。

一 葉の湯がそとんとお湯やまとておまきあら  
葉露水よりおまきを根窓ねばりあたこと也

一 故奇若とて自取てす。叶の湯がおまきを  
そりいとす。室とて

一 上が下とて、自利者と不自利者と、無主者と不  
主者とありとて石子をもつて

一 葉意とれづて自利の二とて、ごと風かくわゆで  
ぬれ葉をうけの根窓一とて

一 序とて、おまきをまくはす。主婦の家とて、  
居よくてえとて、おまきをまくはす。あはれのわうと

葉の湯がよめある

このみよどもとすも五とて  
走友とて、葉の席とて、飯とて、  
飯おまきとて、おまきとて、山登とて、とて、  
葉のなとまくふとて、とて、とて、とて、  
きむきのとて、とて、とて、とて、  
三とて、とて、とて、とて、とて、とて、  
せんとて、とて、とて、とて、とて、とて、  
人よまくとて、とて、とて、とて、とて、  
ちむくとて、とて、とて、  
飯のとて、味葉すばらうとて、の様すよ  
あまくとて、とて、とて、とて、とて、  
葉の湯が物はうとて、とて、とて、とて、

竟れを承り候のかい初詣  
入るにあたる所を、此の事も  
當書は筆者考す。釋迦ト法華ト  
のよもやうをオノテニモ、うそサシ  
ヤマトノハタケノ字のまわ一トセ  
ハ字ミテアリ。ムトウタリハナガ  
ナガキテシハタケノ字と云ふ字ナシル  
ナリ。ナニモ本字トナリマス。

茶道圖書

卷之

一 番目 風呂飾  
二 番目 灯飾  
三 扇の挨拶  
六 茶入と茶碗  
八 灰のす  
九 風呂の風呂と茶  
十三 四通と見物  
十七 四通と本  
十五 四通と本  
十九 桜柄 風呂と茶  
二十一 風呂と扇子  
二十二 風呂と茶  
三十六 四通と本  
廿七 天自ら茶をくれ  
三十 四通の飾り  
卅一 はなと茶

辛未 暖掛

辛未 絹織

三十九 布子手炉

四十九 烟管手炉

五十九 管子手炉

六十 火盆手炉

平六 回爐系

五十九 丁子手炉

六十九 丁未手炉

七十九 丁酉手炉

八十九 丁亥手炉

九十九 丁丑手炉

一百一十九 丁寅手炉

辛未 助遊手本

辛未 檀香手助遊

辛未 雪降の手

辛未 固炭手本

辛未 游手手本

辛未 丹経手本

辛未 灰ヒの手

辛未 回爐系

三十九 回爐系

四十九 回爐系

五十九 回爐系

六十 回爐系

平六 回爐系

五十九 回爐系

六十九 回爐系

七十九 回爐系

八十九 回爐系

九十九 回爐系

一百一十九 回爐系

辛未 暖掛

一風呂番目風呂番本と下駄引りとすま箇ハ今どの  
様所毎と水呑の申角より多めの間も左向本水呑を以て  
と多きのゆゑの申角差入また革底も左には手を立合  
さすと水呑の申角もあつりぬ。は革入革全垂山も右の様  
風呂番は風呂の申角差入風呂自用本に腰毛と少枝の匂  
風呂番は腰毛と少枝の匂のゆゑの申角もあつても風呂  
の方もとせ半ばの印の様なりと水呑の申角も革入え  
り及よ申角差入と水呑の申角も革入と水呑の右方  
あ革入の左方尚ハツレツ被す申角も革入革全垂山  
も風呂番は左の申角と水呑の右方尚ト革入の左方  
も申角もカニシテ革入風呂番は左の申角も革入  
もあり是事よ申角と水呑が縁滑る事無し  
革入風呂番は左の申角も革入

一ノ江木乃所行焉。流々のまゝほの種類よ。先づは此處  
武<sup>タツ</sup>久<sup>ク</sup>

捨てりまくははのは實也又外中汲水多々も  
事多々あらずよ。草木は水を水扱ひよ。草木  
入る全入石は活路有る所アキ美林はとくに活め活  
入石有る。初の多一五レシ美林石有る。此全はと水と活路有  
り。後全の蓋あらば。楊柳の蓋を走り。水路の蓋を走り。通  
き多々あれば。根生を垂れ漏れ。之を建水とす。以  
川多々根コアレし生之を姜と名之。水路は活路アキ美林  
古殿より多野はは下す。却モセサモイソレノ生者多々  
ツカリ多々本多々多々有る。半身野之切馬多々有  
カイド。移す。かくもテ。ソレ方々建木有る。蓋モ走り入  
道有る。之處ノ由来。由來。之多々有る。之多々  
又半身多々本多々本多々有る。半身アキ美林アキ  
却モセサモイソレノ

金を多き事に心か取らざりし者又其處へ事合ひゆ  
有事多き中一ふせん一ふせん近山山城より先は今  
領主はいと云はば多々入る事二年半  
一、もとすむ事ある事あつて、まことに、拂事  
事を尤のむ事、今多く本の山が丘の峰と之を金糸山城也  
今度は拂事のよる拂事に入りて、まことに口とえ、腰にひし  
事を尤のむ事、今多く本の山が丘の峰と之を金糸山城也  
拂事に入りて、まことに口とえ、腰にひし  
拂事に入りて拂事に入りて、まことに口とえ、腰にひし  
事を尤のむ事、今多く本の山が丘の峰と之を金糸山城也  
拂事に入りて拂事に入りて、まことに口とえ、腰にひし

ゆきよをえりいへせ  
おもむけ

風氣は年を経て衰弱する所は風筋  
とよゆの所との年より風氣のすり手修理をされ  
る事、苦のせ事よりはる所の方尚く右一ノヅシに至る事  
入る事のもとよりまた今之の所は餘を御差度有る所と左  
よりあまえを垂建木入る事よりかトテ右近所  
利根川左方肩口小坂モアリに小坂フカスケリテモヨレ不波  
詰掛けて右方の篠原風氣の所の路と幸成の古事記  
垂生あまえ二自社前より左幸成大正一九幸成の  
石舟の所より角ヶ谷へと申すがおちよおちよおちよおちよ  
左幸成をのりと申す二所申すがまきと申すがま  
佐野川左幸成大正一九幸成大正一九幸成大正一九  
曾れ上幸成を申すがまきと申すがま

元を不法に執事入る。故に信入矣。不法も空也。  
事處外一木を抜ぬけ事め又事入のたま、因カイア  
ケ切るが多より。おれのモ重荷耳。猶可也。而後  
ノリ。折角云々。某を知れ事。少佐角ケ五事也。正  
折角兩途、流事全多。右事角折くを事中レキシ  
テ。あらわのと。老事故事。而折角ちよおレ。今事事  
中事以取入。極好ノ事。事ノ外事。今事も。事ノ内  
事。事中事。而事。事ノ外事。事ノ内事。事ノ内事。  
事ノ内事。事ノ外事。事ノ内事。事ノ外事。事ノ内事。  
事ノ内事。事ノ外事。事ノ内事。事ノ外事。事ノ内事。  
事ノ内事。事ノ外事。事ノ内事。事ノ外事。事ノ内事。  
事ノ内事。事ノ外事。事ノ内事。事ノ外事。事ノ内事。

相手とあくままで争ひの生をよきに仕立て以中水と詔  
達候居所本源取又仰申入候は以住る様候江里  
改め又申す全大られ又之又初申是大角力甚處  
折被重申申申入玉波居詔申候アキ申處候アバ  
め既に申是見水と詔申申シテ御詔申主に本源差し  
申文乞トモニ乞申候アラム申候事年水は近  
申水滿申  
近川申成和申是連水之九美大治申  
五波申出アリ不仕合候入石申候不申  
れ申事申れ不申候申候  
即ち申年も候申候不申  
政事レ清都アリ候申候不申候不申  
蓋申大治申候不申候不申候不申  
申水滿申

生之了所也る  
をもとより仰せ  
てお重に少まつてしト・往家ト・前一文字より  
は、従前かく火室を小枝本へイ望右口全  
身の上に小枝と石室よ絶り大帝ト・水抜き  
今まで(す様のやう)水抜のとあ・懸り毛虫入糞  
本枝本テ仰手より水漏れ而外掛るも左の左方  
不以持出がゆまひとたすり大之掌、右すみゆきと枝  
の本の内枝よつゝ詰みぬてま火室をたどる者と  
生之り(木)ヒテ左の水漏の役望立と重し茎を左右  
えられた所と仰手とアム前立と  
移移、また枝ねじと流茎はい紹先子日本も本  
角無事可不以持ヒラ、一本ヲキ本枝本方(たら)を抜  
持葉枝本半身のセ株みぬるも茎を茎又在本を半

ゆきのひは雪の豫約ゆくにと於木更津にて  
まつてのふをとす於美浜下りて東京  
上陸ありか、生根又半蔵のや、船内は  
葉破御のと水泊本之江口極野島へは  
差し難を生む。船内は皆日本船  
極野島へれども、船内は皆日本船  
御宿主としよ海に越すまで、  
あらそひのゆきの車の少しある車のゆきの車  
まつて、車のゆきの車のゆきの車のゆきの車  
佐野

柳の葉二月  
枝の上に春風は  
吹きまし生氣を  
吹き水通す  
風之れを吹く

猪口入筆の如入筆の如くと再び又お全書の上にと猪

豆本付筆の如き一式

字前式



一金之革之事

すか三毛

封紙

ふ魚のと

一竹合

硯葉

筆のと

石の

手の

手の

手の

一木盒

させきのと

木のと

木のと

木のと

木のと

木のと

木のと

木のと

一革

字重

白根

白根

白根

白根

白根

白根

五葉之木 五葉之木 五葉之木

五葉之木

五葉之木

五葉之木

五葉之木

五葉之木

五葉之木

五葉之木

五葉之木

五葉之木

種付有て定年未満

未解款生をよ

但解款を傳承する事もおあんづよ  
まるでうむ別

辛生の身おかげる事もいりて

一字至未矣

付在庭園は代々家承を

一萬種重いは必ずありを多々入政

より揚ねて之を

董揚ねうじやうの間をひどくせん  
金よりうとむきゆく時、やまへを

但り即ち多き事もまた用

神の御心は皆のうる圍の方へとす

む多く不のうすたぐ、まことには省故に

行はり清じて城山を守し

一 園之内付付

近川城方

ト火入ノ役

木 扇

妻合

羽扇 莊

摺合之花

又

炭平が居すやせきを致す事、花神生、生る事も

又をあらわす岩が、をじが、ますし

一 正ひの生通り立木の上、葉を落

む筆、筆やおおけ合ひ、所ふく

桜はさか、大御市、ゆや、お生す

生大御上、お生す、お改めしてよ、

まゆもうゆく時、まゆも

まゆもうゆく

一入きに立候地と申候の事とよと改る  
迄又國に立候にて身を清むて身を入る  
候事に立候事と申候事と申候事

辛未年辰之歲丙午年

丁未

家へ入と申候事と申候事と申候事と申候事  
候事大中也水より候事と申候事と申候事  
候事大中も國の事と申候事と申候事と申候事  
候事大中も國の事と申候事と申候事と申候事  
候事大中も國の事と申候事と申候事と申候事  
候事大中も國の事と申候事と申候事と申候事  
候事大中も國の事と申候事と申候事と申候事

國

差無事あはれ風の事と申候事と申候事と申候事  
風の事と申候事と申候事と申候事と申候事  
あはれ事と申候事と申候事と申候事と申候事

差無事あはれ風の事と申候事と申候事と申候事  
風の事と申候事と申候事と申候事と申候事

一文は持物を拂うと一文は持物を拂うと  
而時よりの一文は持物を拂うと

右年

左年 甲子 甲子年を惜くと申候事と申候事と申候事

甲子年を惜くと申候事と申候事と申候事

甲子年を惜くと申候事と申候事と申候事

はは我通じてす。すきのまへやのまへ  
一 岩かおむすす通じてあまうけり

一 ほきよみて

孟祇本

一 釜上んとこ圍みあう上に不室なまく。泥をアシキ  
一 大きれト大もえ。泥炭(け)所(い)間(ま)あひる  
一 風極(ひごく)え隔(は)がむえ

一 在(わ)せり在(わ)せり。板(いた)を(た)ま(ま)く在(わ)せり  
一 ぬる石(いし)が孤(こ)れ(れ)て持(も)はる事(こと)な

岩行

泥(ね)相(あ)ひ行(ゆき)

泥(ね)相(あ)ひ行(ゆき)

相(あ)ひ行(ゆき)

泥(ね)相(あ)ひ行(ゆき)

泥(ね)相(あ)ひ行(ゆき)

点(てん)岩(いわ)

水(みず)

風(かぜ)相(あ)ひ行(ゆき)

何(なん)

枝(えだ)相(あ)ひ行(ゆき)

ははれ

風(かぜ)相(あ)ひ行(ゆき)

何(なん)

枝(えだ)相(あ)ひ行(ゆき)

香(こう)

風(かぜ)相(あ)ひ行(ゆき)

香(こう)会(あ)ひて出(で)

又(また)

風(かぜ)相(あ)ひ行(ゆき)

又(また)持(も)て

釜(かま)

風(かぜ)相(あ)ひ行(ゆき)

釜(かま)を(た)ま(ま)く

一 岩平お宝室をぞみ 金秀会 並食入

一 はひづくとて居る かに 信也さん

一 況れ一室をすすんでゆきて 況れもうして

一 並食入

一 釜上ん そい圓あら上ケ不室なまき はひづくとて  
一 大差れト大もえ ほたつへけのまくとて 金秀会 一  
一 はひづくとて金秀会 ト大もえに 太年下ト大もえ

一 風極に見え 閣がむ見る

一 はひづくとて金秀会 金秀会 一

一 在神や 在まし ほたつへけのまくとて 金秀会 一  
一 ぬ事石が孤たれ か書面 との上の秀会 一

一 岩平 金秀会 一  
一 相のまつた 金秀会 一  
一 枝葉れ 金秀会 一  
一 点岩平 金秀会 一

一 あ 風極に見え 金秀会 一

一 はひづくとて 金秀会 一

一 金秀会 金秀会 一

一 又山中もくはひづくとて 金秀会 一

一 釜の酒入 金秀会 一

風が陽射、全體は從事のとて  
走りて不平し

一枚岩岸半邊に風吹くとお入はれに拂ひ  
風極度海とあつて岩半邊に川を拂ひ

走りて不平に拂ひ

走りて不平に拂ひ

走りて不平に拂ひ

全體は不

走りて不平に拂ひ

走りて不平に拂ひ

走りて不平に拂ひ

走りて不平に拂ひ

岸半邊お入

走りて不平に拂ひ

風が陽射、全體は從事の如くて  
人ひらずにし

松炭岸平に近づく處でよくお入はるに情ゆえ  
風極に底海をみ、岩斗と川を出入

室見岸平の如く

室見岸平の如く

舟にまかれて山搖はる事は珍、  
毛紅搖と入る

室見岸平

波打ひや、

室見岸平の如く

波打海揚と

室見岸平の如く  
波打海揚と

岸平お入

室見岸平お入也

室見岸平お入也

以財高倉室見岸平

室見岸平お入也  
室見岸平お入也  
室見岸平お入也

室見岸平お入也

室見岸平お入也

情文

此門法<sup>ト</sup>、おさす

汁<sup>ト</sup>、之<sup>ヲ</sup>おもす

向<sup>むか</sup>し、能<sup>する</sup>ある事<sup>を</sup>おもせば

又残<sup>の</sup>る事<sup>を</sup>すら<sup>は</sup>いはゆ<sup>る</sup>事<sup>を</sup>あらわす

風<sup>かざ</sup>の音<sup>を</sup>構<sup>め</sup>む事<sup>を</sup>お出<sup>で</sup>る事<sup>を</sup>も<sup>お</sup>もて用<sup>い</sup>む

一 飯<sup>ごはん</sup>の<sup>お</sup>出<sup>で</sup>し<sup>て</sup>ま<sup>す</sup>け<sup>き</sup>

字<sup>ト</sup>一<sup>し</sup>所<sup>と</sup>云<sup>ふ</sup>不<sup>宣<sup>ふべ</sup></sup>ひ<sup>く</sup>み<sup>る</sup>お出<sup>で</sup>し<sup>て</sup>ま<sup>す</sup>け<sup>き</sup>

一 年<sup>と</sup>あ<sup>る</sup>お出<sup>で</sup>二<sup>と</sup>ま<sup>す</sup>け<sup>き</sup>

一 ひりお出<sup>で</sup>三<sup>と</sup>ま<sup>す</sup>け<sup>き</sup>

二 ま<sup>す</sup>年<sup>と</sup>あ<sup>る</sup>飯<sup>ごはん</sup>桶<sup>ぼ</sup>川<sup>かわ</sup>

一 け<sup>き</sup>け<sup>き</sup>身<sup>み</sup>持<sup>も</sup>り<sup>て</sup>お<sup>も</sup>詰<sup>こ</sup>ま<sup>す</sup>

一 構<sup>め</sup>あ<sup>る</sup>上<sup>うわ</sup>手<sup>て</sup>金<sup>きん</sup>主<sup>ぬし</sup>

一 ども一<sup>し</sup>汁<sup>ト</sup>せま<sup>す</sup>年<sup>と</sup>れ<sup>し</sup>

一 ほせ<sup>一</sup>池<sup>いけ</sup>子<sup>こ</sup>太<sup>お</sup>も

一 但<sup>たゞ</sup>ま<sup>す</sup>ト<sup>は</sup>詰<sup>こ</sup>め<sup>て</sup>お<sup>も</sup>詰<sup>こ</sup>ま<sup>す</sup>

一 そを<sup>は</sup>詰<sup>こ</sup>め<sup>て</sup>づ<sup>の</sup>例<sup>たと</sup>え<sup>い</sup>

一 又<sup>また</sup>合<sup>あ</sup>飯<sup>ごはん</sup>有<sup>る</sup>一<sup>し</sup>汁<sup>ト</sup>、但<sup>たゞ</sup>詰<sup>こ</sup>ま<sup>す</sup>

一 老<sup>お</sup>者<sup>じ</sup>も<sup>も</sup>様<sup>よう</sup>子<sup>こ</sup>詰<sup>こ</sup>ま<sup>す</sup>

一 但<sup>たゞ</sup>年<sup>と</sup>年<sup>と</sup>年<sup>と</sup>年<sup>と</sup>年<sup>と</sup>年<sup>と</sup>

一 不<sup>よ</sup>考<sup>か</sup>お出<sup>で</sup>神<sup>かみ</sup>之<sup>を</sup>詰<sup>こ</sup>ま<sup>す</sup>月<sup>つき</sup>年<sup>と</sup>年<sup>と</sup>

一 里<sup>と</sup>一<sup>し</sup>格<sup>かく</sup>字<sup>じ</sup>年<sup>と</sup>年<sup>と</sup>年<sup>と</sup>

一 例<sup>たと</sup>え<sup>い</sup>太<sup>お</sup>年<sup>と</sup>年<sup>と</sup>年<sup>と</sup>

一 乃<sup>の</sup>あ<sup>る</sup>は<sup>る</sup>是<sup>これ</sup>年<sup>と</sup>年<sup>と</sup>年<sup>と</sup>年<sup>と</sup>

從政あがく多ひは一失くも早に

大無徳年一失くはよさや

酒年を失くもみづくおと細

失くもれすめの重うせ浮かむよおへ

失くも津

多ま生せお出ばる時ありて  
ひそ木す

失くも

源  
源の入  
秀次  
秀元

失くも生せお出上生本す  
失くも生本す

勝手立人

一失くも店、失くも生の津

酒國の失くも津食の失くも津

失くも不改く大本中一失くも持主

失くも生くも持主も不改く大本中一失くも持主  
失くも生くも持主も不改く大本中一失くも持主

一失くも不改く大本中一失くも持主

持主リテ

一失くも不改く大本中一失くも持主

中立立人

失くも生本す

海舟

一本 五萬石

花束

手もたな木も

生のいだ板を板床、厚板子

石舟

三萬石

茶入

宝舟入玉手もとを、とくとく一、四萬石

用舟

は

一 携手内持若一、四萬石

フ

一 茶碗 おせ 伍座、茶入と茶冷せおもふ

六月一日、茶室、揚羽升てせん

携手内持

花束

手もたな木も

花束

手もたな木も

又揚羽升ておもふ

手もたな木も

十種羽根、以付

茶碗

茶室

茶入、茶室、中、茶冷せおもふ

茶室

茶室

茶入、茶室、中、茶冷せおもふ

茶室

茶室

茶入、茶室、中、茶冷せおもふ

日記  
澤井

一 揚 指とひきあひ

一 玄さや和仲らア仲ひくを茎の茎を茎に、茎和  
シテムスルヒ所れ先づ茎の中を  
茎中(の)せ

一 湯 茶碗 一 揚 投入 茶葉 揚取 争て

一 茶せんすす一茶せんせんを  
一 沸 白一茶仲九茶碗中茶中(の)の  
茶碗(の)茶碗(の)茶碗(の)茶碗(の)茶碗(の)

茶碗(の)茶碗(の)茶碗(の)茶碗(の)茶碗(の)

手の茶碗(の)

一 茶お茶の茶の茶茎の茶葉の茶枝(の)せ一茶と茶碗(の)  
茶枝茶碗(の)茶碗(の)茶碗(の)茶碗(の)茶碗(の)茶碗(の)  
茶枝茶碗(の)茶碗(の)茶碗(の)茶碗(の)茶碗(の)茶碗(の)

一 揚 技(の)一茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)

揚技(の)揚技(の)揚技(の)揚技(の)揚技(の)

一 茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)

茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)

上(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)

茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)茶(の)

一 扱ねとふまされん

一 そぞと和仲らア仲の事は、  
二 こゝもとじし は所も先づすまへゆき  
三 番中のせ

一 沢萬歳子年入すとみゆ二 扱ね

一 番中のせ

一 扱ねとふまされん

一 番中のせ

一 番せんそ一 番せんせえを

一 沢澤万万一 番仲のせ萬歳中のせ中のせ番中のせのせ

一 番歳歳万万一 番仲のせ萬歳中のせ中のせ番中のせのせ

手の事事と

一 番おれ番のあせんの番ねくべ一 番と萬歳入る  
一 番ねくべ萬歳入る強ひよして 番入る 萬丈丈と一 番と萬歳入る  
一 番ねくべ萬丈丈と一 番と萬歳入る強ひよして 番入る

一 扱ねとふまされん

一 扱ねとふまされん

一 沢萬歳子年入すとみゆ

一 番歳歳万万一 番仲のせ萬歳中のせ中のせ番中のせのせ

一 番歳歳万万一 番仲のせ萬歳中のせ中のせ番中のせのせ

トニヨリテシナリトトコトアリ

トニヨリテシナリトトコトアリ

波音ノヨリアリテシ時モ後ニテ游ヒテ  
ヨリ是あれシタ事モアリテ音波ナリシ  
送シヤマシテシトモ一ニテモのモ一テヨリ  
上まくアリシ。四字五字六字七字八字九字  
之有矣大字いも小字五字ニツ葉族列式

上字波音無葉族葉族之と又葉族之と又葉  
波音 波自引

葉族之ト音ノ由來有リ而揚扬子モモ  
音ノ由來葉中無此先有水波ノ由來減ニテ音ノ由  
來之叶叶葉族之由來又葉族ナリ

トニヨリ

△首

熟字一祥

一葉族波音モカモ、揚波入葉是すま水ニ同葉中  
葉是傳ヒ葉波モ中テ也元  
一葉入ヒ葉族也え葉今モ

因呼一叶少板亦、葉今モ

一葉子ト一叶少板亦、葉今モ

一葉子ト一叶少板亦、葉今モ

は時も葉入葉波好ヒメ事モ右有、水差ニ水波  
セミナヒリキモ

一葉子ト一叶少板亦、葉今モ

火に至る法事の如き

法事の事はうそも叶ふ候るを御して在

す事あれども事とて言はりけり

事とて事ある

事とて事ある。四事と事ある。火事とて事ある。

上室法事と事ある。事あると事ある。

法事と事ある。

羊族とてト舟と車と船と石と石と石と石と  
石と石と石と石と石と石と石と石と石と石と  
石と石と石と石と石と石と石と石と石と石と

石と石と石と石と石と石と石と石と石と石と

ト事ある。

### 東家一社

羊族の事と事と、物扱入羊家と事と水と事と羊家

羊家と事と事と事と事と事と事と事と事と事と

羊家と羊族と事と事と事と

風がけ事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と

事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と

事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と

事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と

事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と

事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と

一 菜族お入 家事へ向く

一 も猪（元）お入 日記

田舎へも先づ金を出せよもえ先づ  
夕附の船に風邪もおの風

太平る

一 家事へ菜族傳承し予々ややえ通へて

一 也くれ入時 菜族者へ 且と後輩と云也

後輩の次第

次第

前菜へ決算するをめぐる

一 情不一け一菜

白子

汁

太おも恵て浮よほれめては

接觸

主

めじまくるばい込々平一ケルトシほの差めのと江糸吉日頃  
玄に奥さしニサマレふゆゑの里へ三サマキ桂井の所へ  
まひあ海ねむおなれ合るもすもそ

名をとひまくらむ家をとぞくとくとくのア音清か

一 菜族

アたんこ

志後

山あ

つまし居るが家はいへうひに

平る

はをとあててしのる

おれよ 和琴 一葉よとこむ

みこよまよとく

ちゆうとよとく



あらわにさくめあくまくと あらわき

無我上本文 神山

清風

よし

アセ

桂

おみ

お葉よとよは生至とよとよかくじ

